

野生動物被害対策資料

ハクビシン アライグマ

埼玉県農林総合研究センター
茶業特産研究所中山間営農担当

ハクビシン



ハクビシンはジャコウネコ科の動物で、もともと日本にはいなかった動物（外来動物）と考えられていますが確定はされていません。

大きさは胴長50～60cmで長い尾まで含めると約90cmになります。

顔には「白鼻芯」の名前のおり鼻から額にかけて白い線があります。この白線の太さは個体によって様々です。指は5本で足跡は猫に似た丸い形をしています。爪痕は不明瞭です。

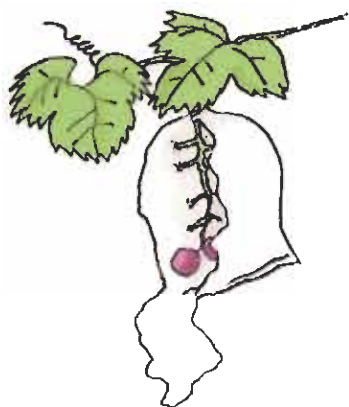


前足の足跡



白い線が特徴

ハクビシン被害の特徴は被害作物の皮を残していくことです。ブドウの被害は袋を口で破き熟した果実から上手に中身だけを食べ、皮は地上に残していきます。ブドウ以外の果樹でも皮が落ちていたらハクビシンの被害と考えられるので注意が必要です。

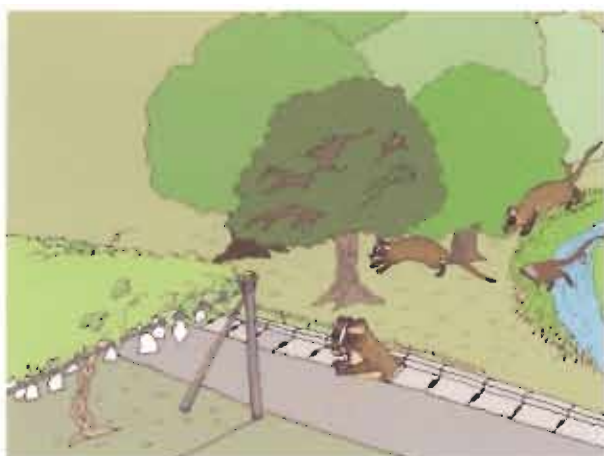


袋の破き方に特徴がある

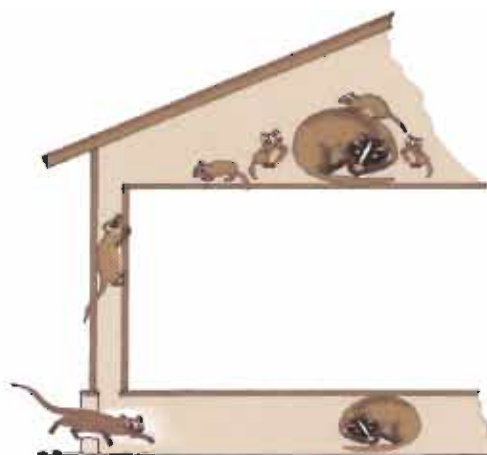


下には皮が残る

ハクビシンは川や用水路、側溝などを移動に使用することがわかっています。新しく被害が発生する場所は必ずといっていいほど付近に河川等があり被害の発生も川側から始まるが多くなっています。



川の付近は要注意！



人家への侵入

アライグマ



アライグマは北アメリカ原産でペットとして輸入されたものが逃げ出したり捨てられたりして野生化したものです。

大きさは胴長50～60cmで体重は大きい個体では10kgになります。

尾には明瞭な縞があるのが特徴で、在来動物であるタヌキやアナグマとの識別点となります。指は5本で長く爪も鋭い。足跡は爪痕が明瞭に残り他の動物と間違えることはありません。



前足の足跡



目から頬の黒いマスク

アライグマは雑食性で、様々な農作物に被害を与えています。性格は極めて乱暴で鶏等の家畜も襲います。アライグマは前足が手のように使えるため被害作物には土の付着と爪痕が残ります。また、手の届かないところへは飛びついたり登ったりしますので枝折れ等の被害も発生します。

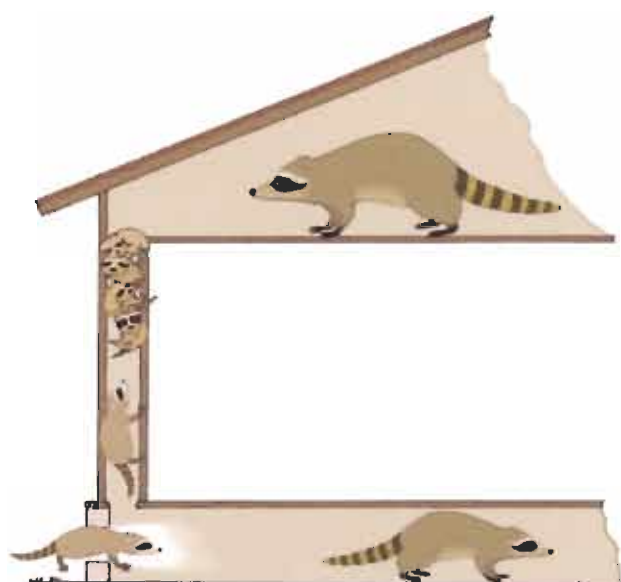


袋に土が付着し足跡が残る



枝が折れる

アライグマは夜行性で昼間は人気のない人家や倉庫等建物の屋根裏や壁の隙間で休息しています。出産は壁の隙間が多いようで、侵入されると騒音と電線が噛み切られる等の被害が発生します。また、川や用水路、側溝等の水際も大好きで移動に際しては頻繁に利用されています。



人家に侵入し繁殖するアライグマ

被害対策

(1) 電気柵と防風ネット

当試験地では4年前からハクビシンとアライグマの被害防止対策に取り組み、このほど、ブドウ園における簡易電気柵と防風ネットを組み合わせた技術が組み立てられたので紹介します。

対策を組み立てるにあたって、まず最初に注目したのが運動能力です。どんなところでもスルスル登り、狭い隙間を移動することができます。中でも驚いたことはハクビシンが細い針金の上を歩けることでした。非常に素晴らしいバランス感覚を持っています。次に注目したのが運動能力が高い割に木から木へ飛び移ることがほとんどないことでした。つまり、ブドウ園や果樹の株から株への侵入は枝から枝へ飛び移るのではなく、地上から非常に多いということになります。このような行動パターンと得意な運動能力を逆手に取って、この技術の特徴である登らせて感電させる技術は生まれました。

電気柵は通常は地上からの侵入に対して地面をアースとして地上部に設置するため、地面から等間隔で数本のワイヤーを張らなければなりません。この方法では伸びた雑草が触れて漏電のため効果がなくなってしまうことが問題で草対策に掛かる労力が大変です。また、地面は必ずしも平らではないので潜られない対策も必要となってきます。

簡易電気柵と防風ネットを組み合わせたこの方法は金属のブドウ棚全体をマイナスとし、侵入するときに必ず通過する棚上部にプラスのワイヤーを1本設置するだけのもので簡単に設置することができます。草による漏電の心配がありません。

(2) 設置に必要な資材

設置にあたって用意するものは①電気柵②防風網③プラスチックのポール④通電用のワイヤー。電気柵は複数のメーカーから発売されていて、最近ではAC電源のほかソーラーや乾電池式のものも多くなり、設置場所を選ばず簡単に設置出来るようになっていて便利になっています。乾電池式のもは当センター

でも試験を実施し、感電したハクビシンは空腹状態であっても1週間はブドウ棚に近づかないなどの効果を確認していて、現在ではハクビシン対策の主力となっています。通電用のワイヤーはステンレス線でもよいですが硬くて張りづらく、また、つなぎ目も出来るので、各メーカーから電気牧柵機に対応したものが発売されているのでそれらを使用すると便利であり、設置作業も楽と思われれます。プラスチックのポールはワイヤーを張るときの絶縁体として使用するもので、電気を通さないものであれば何でも大丈夫です。

(3) 設置方法

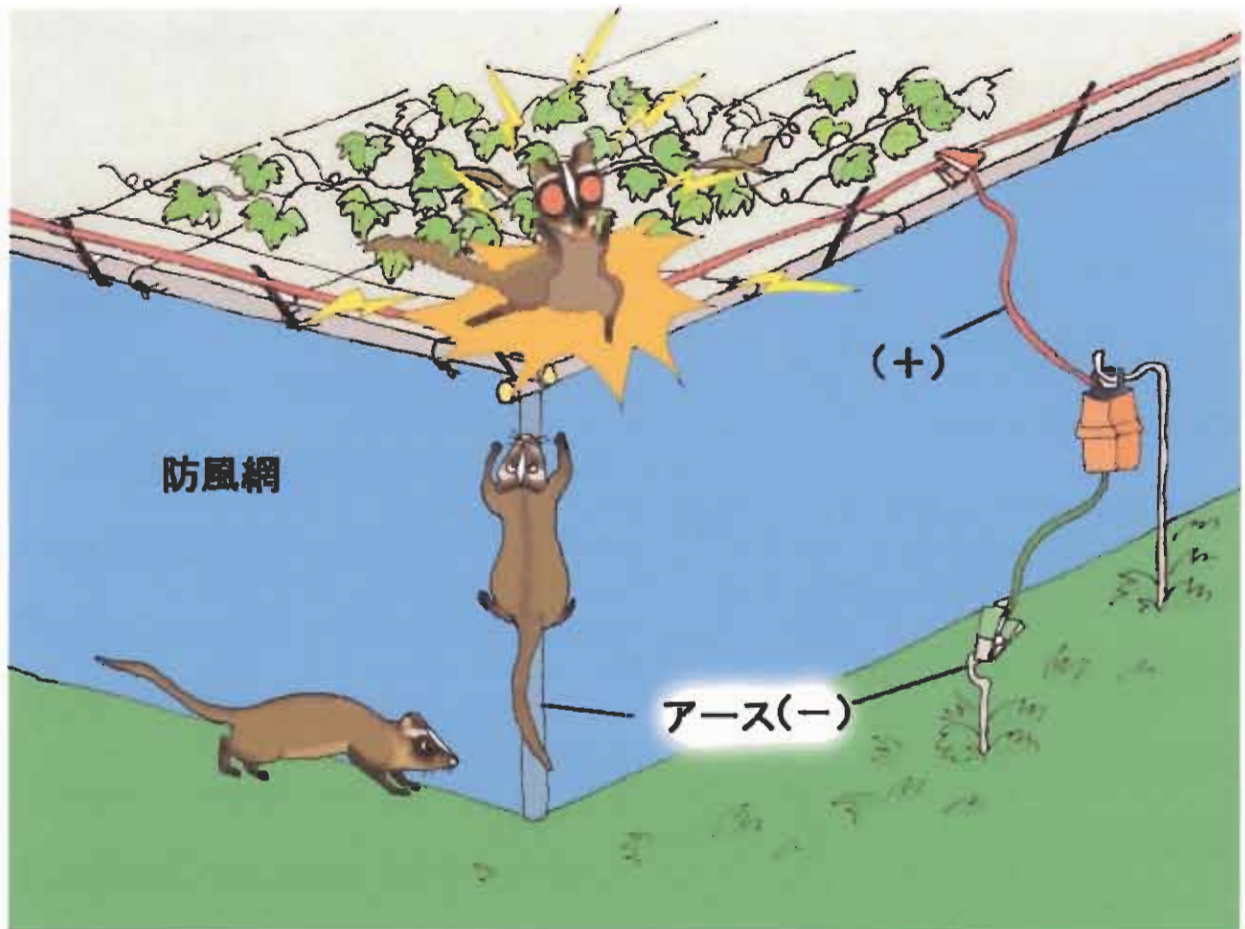
設置方法は、最初に防風ネットを設置します。設置する際には防風ネットは裾をしっかりと埋めることと出入り口の合わせ部分に隙間を作らないことがポイントです。ハクビシンやアライグマは防風ネットが設置されたブドウ園では最初に周囲を回りながら隙間を探して侵入を試みます。ハクビシンやアライグマは自ら大きな穴を掘ることはしませんが、隙間を広げるのは得意で、ちょっとした隙間から侵入されることとなります。

次に通電用のワイヤーの設置です。棚上部の支柱に絶縁用のプラスチックのポールを10～15cmくらい飛び出すように取り付けます。これに横の支柱から5cmのところワイヤーを張っていきます。四隅はハクビシンが最も侵入しやすい場所なのでポールの数を増やしてしっかりと張ることがポイントです。

これで設置は終了です。後は通電すれば良いわけですが、注意しなければならないのが漏電対策です。本技術は通常の電気柵の張り方と違って草による漏電の心配はありませんが、ブドウの枝の伸育は非常に早く、少しでもワイヤーに触れると漏電して効果がなくなりますので注意が必要です。ハクビシンは明確なナワバリを持たず、複数のハクビシンが同じブドウ園を利用することと親子で生活している期間が長いアライグマはブドウの時期までは複数で行動していることがわかっています。このため、最初の個体が足をかけワイヤーをずらして漏電してしまった場合、その後の個体は簡単に侵入できることになるので設置中は毎日の点検を実施することは必要となります。

(4) 最後に

ブドウ園におけるハクビシンの被害対策として組み立てた乾電池式電気柵と防風ネットを組み合わせた技術は効果が高く簡単に安価に設置できます。新しい技術対策は効果はもちろんのこと簡単に安価であることが最も重要です。一部では乾電池式電気柵は湿度の高い日や雨の日では能力が低下するといった指摘があるようですが、簡単に設置でき移動も簡単であるというメリットは大きいと考えます。被害対策は動物の慣れとの戦いでもあります。電気柵も常に設置しておくのではなく、必要なときに設置するという考え方がより一層の効果を生むのではないかと考えられます。乾電池式電気柵は応用により様々な場面、また、様々な作物で利用が期待できるものと考えます。



ブドウ棚における電気柵

〔 登らせることができれば
様々な作物に応用可能 〕